

RadioDays



ラジオデイズ

声には、
人の体温があり物語がある

月刊「ラジオデイズ」11月号（通巻第6号）
2007年11月8日発行
【発行人】赤塚祐一郎
【編集人】大森美知子
【発行所】株式会社ラジオカフェ
東京都新宿区新宿1-6-5 シガラキビル 6F
Email: info@radiodays.jp FAX: 03-5356-8281
http://www.radiodays.jp

11

November Edition
2007, vol.6
Free of charge

この人の声が聴きたい●11月

清水哲男さん（詩人）

一九七〇年の風景を切り取る ために詩人に必要だったこと



熱烈というわけではないが、私は清水哲男のファンである。ファンの書く文章は、一種のラブレターでありそれ以上のものではない。ただ、どんなに情熱的に燃え上がった恋も（いや、情熱的であればあるほど）、燃えつづけることはできない。しかし私は、ケツの若い青年期に清水哲男の作品に惚れて、頭上に白雪をおく年になるまで、四十年の長きに亘って恋しつづけてきたのである。

その秘密は、私の異常なストーカー的な執着にあるのではなく（私はいたって飽きっぽい）、やはり清水哲男という人の詩作品のなかに存在しているというべきだろう。では、それは何かと問われるとちよつと口ごもってしまう。たしかに秘密はそこにあるのだが、それを名指すことは禁じられている。詩とはそういうものだ。

かつて、吉本隆明は詩が詩であるための条件について、たいへん面白い評論をしていて、私は深く納得した。歌謡曲の「五番街のマリー」（阿久悠作詞）と、鈴木志郎康の同じマリーが登場する「便所の窓の間から」という詩の、二つの作品を較べて、「五番街のマリー」は、歌謡曲の歌詞としてはたいへん優れたものだが、そこには本当の意味での「詩心」は働いていないということを説明した文章であった。

どうして、「便所のマリー」は詩になり、「五番街」は歌謡詞以上のものではないのか。「五番街」も、たいへんよくできた「詩」だが、

それは言葉を勉強している人が、知的に上昇してゆく過程で生まれた「詩」であって、受験勉強の成果のようなものである。一方、「便所」のほうは、知的なところから非知的なところへ向かっていく過程で言葉が選ばれている。そういった自己相対化を経なければ捉えられないものがあり、それを捉えなければ詩とはいえない。まあ、こんな意味のことを吉本さんは言ったのである。

それが清水哲男の詩とどんな関係があるのかって？ いや、私が言いたいのは、清水哲男の詩のことばの通俗性には、用心しなければならぬということである。それは一見とつき易い、平易な言葉だ。しかし、そこで表現されていることはたいへん微妙な、綾のある心理の世界だ。そして、清水哲男とは、まさに自らが選んだ言葉と、それを選ばせた自らの意識の落差に十分自覚的であるような詩人であり、その落差そのものを表現できる稀有の職人として私たちの前に登場したのだ。そうでなければ、こんなふうに的確にひとつの時代を切り取るなどできるはずもない。

唄が火に包まれる
楽器の浅い水が揺れる
頬と帽子をかすめて飛ぶ
ナイフのような希望を捨てて
私は何処へ歩こうか（美しい五月より）

（ラジオデイズ・プロデューサー 平川克美）

ラジオデイズは、文芸・対話・話芸を三本の柱に、声のもつ魅力に特化した音声コンテンツを制作し、ダウンロード販売するWEBサイトです。飘逸で含蓄のある随筆、瑞々しい感性の横溢する詩歌や小説の朗読、個性的な対話者たちの真摯な言葉の応酬から生まれる知的交歓、粋と人情の落語や講談などなど、大人のお楽しみにもたえる魅力的なコンテンツが満載です。

ただいま入会随時受付中！

会員（入会金・会費無料）になられると、月替わりで期間限定の無料コンテンツがお楽しみいただけます。サイトでは、声の魅力を凝縮したコンテンツのすべてがで聴取できるほか、演者のプロフィールやコラムなど読み応えも十分です。どうぞお立ち寄り！

<http://www.radiodays.jp>

対話の街からは、内田樹のダイアログ・シリーズをリリース。小林秀雄賞を受賞された気鋭の思想家・内田樹氏と、悪ガキ時代からの盟友ラジオデイズのプロデューサー・平川克美とともに、錚々たるお客をお招きして語り尽くします。ただいまは脳医学者の養老孟司さんとの対談「概念化する世界の読み方」の第一章が、無料ダウンロードできます。今後も哲学者の藤田清一氏、音楽家の大滝詠一氏ほか魅力的な「剣客」が続々登場！

文芸の街からは、作家の大岡玲さん、関川夏央さん、詩人の清水哲男さんなど多彩な解説者を迎えた名随筆のアンソロジー「声のエッセイ」コレクションが評判を呼んでいます。また、「声の詩集」シリーズからは、女優の鳥丸せつこさんが、うねる海のような深い声で朗読、詩人の正津勉氏がナビゲートする『詩人の愛』Ⅰ・Ⅱをお届け中。サイトでは、川端康成賞作家でもある詩人の小池昌代さんのコラム「言問い小路」も好評連載中。

話芸の街からは、ラジオデイズ収録の新鮮なオリジナル音源を続々追加してお届け中。時代に磨かれた古典を自家菜園中に現代に演じきる斬家たち。そして、時代の流れから湧き出た、かつて語られたことのない新作に鑄を削る斬家たち。ライブ音源だけに一期一会の斬に出会えます。いずれも、落語研究の第一人者・山本進先生と落語作家・本田久作氏の落語随談や、演芸研究者・大友浩氏の解説付。より一層落語が愉しくなりますよ。

●第6回 オリンパスシンクろ寄席

「日時」11月29日(水)午後6時45分開演(午後6時15分開場)

「場所」お江戸日本橋亭(半蔵門線 銀座三越前)

すべての落語は新作として生まれ、生き残ったものが古典になる……、そんな過酷な道に進んで身を捧げる人々がいます。それは新作落語の演者です。時代の流れから生み出された一席の斬を、口演を重ねながら書き換えていく。そんな現代の落語ばかりをコレクションしました。毎回二人の演者が新作落語を二席ずつ競演します!

快樂亭ブラック

(かいらくてい・くろく)

立川談志入門。昭和五四年、二ツ目昇進、「立川談志」平成四年、真打昇進と同時に、二代目「快樂亭ブラック」を襲名。英国人とのハーフ、前座時代からの通算改名記録史上最多の十六回、破産に立川流脱退に大病と、生き様が「落語」そのものの名物落語家。



立川志らくら

(たてかわ・しらく)

立川志らくら入門。平成一四年、二ツ目昇進。談志の孫弟子としては初の二ツ目ということになかど注目的になる志らくらは、前座時代に高田文夫氏の付き人もつとめ、新時代の落語を築き上げるべく、新作、古典の研鑽に余念がない。



うるさ 明烏い話

連載第7回



本田久作



「粋」の反対は「野暮」だとの疑問も感じずにそう思っていた。たしかに東京ではそうであろう。落語の中でも「粋」と「野暮」は対立する概念として捉えられている。ところが上方落語ではこの「野暮」という言葉が見当たらないのである。もちろん「〇〇がある」とことは証明できても、「〇〇がない」というのは証明不可能な命題であるから、上方落語では「野暮」という言葉は一切使われていないとは断言できない。だがそれにしても、東京の落語があれば「粋」を語り、「野暮」を馬鹿にする言動に満ち溢れていることを考え合わせると、上方落語では「野暮」はそれほど重要なキーワードになっていないことはたしかである。

東京の落語で「野暮」の代表は田舎者だが、この田舎者も上方落語では登場する機会は少ない。「勘定板」「池田の猪買い」「権兵衛狸」「夏の医者」などには田舎者は登場するものの、彼らは東京の落語での田舎者のような揶揄の対象にはなっていない。「勘定板」で大坂の風習を知らない田舎者が頓珍漢なことをしでかしても、「野暮」とはとらえられていない。ただ「阿呆」なだけだ。しかもここで「阿呆」は無知であるよりも無垢であるニュアンスの方が強い。一方東京の落語は「お見立て」「五人廻し」「文違い」といった廓斬で、田舎者は「田舎者」「野暮」というルール

によってあつさり裁断されている。「首提灯」「棒鱈」に出てくる田舎者も同様だ。それどころか、「野暮」の反対の概念である「粋」ですら、それが過剰になると「酢豆腐」の通人のようにやはり軽蔑の対象になってしまう。この斬と同工異曲の上方落語「ちりとてちん」では、主人公の知ったかぶりは揶揄されても、野暮や粋という言葉で判断されてはいない。

思うに、大坂の人間には「野暮」という観念はなかったのではないか。ないと言うのがあまりにも断定的であれば、その観念が薄かったと言いつてもよい。江戸っ子が粋であることにこだわり、他人から野暮と言われるのを極度に怖れたような精神性は大坂の人間にはなかったし、今もない。少なくともかなり欠けている。事実、私は大阪で生まれて育ったが、記憶する限り東京に住みだすまで「野暮」という言葉はつかつたことがない。一方「粋」はつかう。けれどもこれはかなり特別な状態を指している言葉で、非日常的なニュアンスが込められている。大阪人が誰かを指して「粋やなあ」と言う時は、その誰かは特別にすぐれた人なのである。普通の人が粋と呼ばれることはない。だから、大阪人は江戸っ子のように誰もが粋になることを目指さない。同時に「野暮」と非難されることもない。

「野暮」という観念がなければ、人は野暮であることを怖れなくなる。ないものを怖れることはできないからだ。東京の落語にとつてかなり重要なチームである「粋」と「野暮」が欠落しているのが上方落語だとすれば、当然のことながらその本質も違ってくる。まず粋が野暮かという差別がなくなる。つまり侮蔑の対象がいなくなる。というか、もともとそんなものだと思っているから、侮蔑の対象を必要とすることはない。だから上方落語に

は喜六はいても、与太郎はいないのである。

差別がない社会、侮蔑される人がいない街は理想的な場所に思えそうだが、実はそうではなく、大坂がそのような都市たり得たのは、大坂人が排他的だったからだ。江戸っ子は陰で馬鹿にしながらも田舎者と共存していたが、大坂の人間は京都ほどではないにしても田舎者を自分たちの仲間として受け入れようとはしない。どちらの方がよいのかということも言っているのではなく、ただそうであったということも言っていることである。物事を善悪で分けて考えることは落語にとっては無用であろう。

●ほんた・きらくさく

一九六〇年大阪府生、ライター。二〇〇一年の「仏の遊び」が国立演芸場日本舞集佳作受賞以来、落語、漫才など新作日本関係の賞を毎年総ナメの業界注目の新進作家。主な受賞作「玉手箱」(国立演芸場日本舞集優秀作)「櫻の舞式」(探座の夢)「幽霊蕎麦」(ずれも落語協会優秀作)など。

私の讀太ばなし 柳家喜多八

き『二番煎じ』

学習院の落研引退寄席のときに、ゲストだった師匠(柳家小三治)がかけた斬。その後入門して五、六年の頃、師匠の同じ斬が一字一句変わらぬのに、いちだんとよくなつていて、攻め方ひとつで変わることに目覚めさせられた。

式『やかんなめ』

埋もれている斬を発掘するというNHKの番組で師匠がかけて、教を願ってから半年以上経った頃ようやく「勝手に憶えていい」という許しが出て演りはじめた斬。お客様からもニンに合っていると褒めていただいている。

参『文七元結』

以前は、保身に汲々とするような文七という登場人物が嫌い嫌い、好きになれない斬だった。それが、自分なりに文七を変える糸口を見つけてからは好きな斬のひとつになり、暮れになると、かならずやるようになった。

第6回 ラジオデイズ落語会

〔日時〕11月9日(金)午後7時開演(午後6時半開場)
〔場所〕コア石響(四ツ谷駅徒歩7分)

江戸時代から明治時代に作られ、数多の噺家によって高座にかけられ、時を経て世相に洗われて、そして語りつがれてきたのが古典落語。それを自家薬籠中に演じきる現代の噺家たち！ 人情の機微に触れ、免疫力増進の涙と笑いの宝庫、至福の話芸の真剣勝負。開口一番は、毎回気鋭の二つ目さんにお願ひします。

柳亭市馬

（りゅうてい いちば）

柳家小さん入門。昭和五九年、二ツ目昇進「さん好」。平成五年、真打昇進と同時に四代目「柳亭市馬」襲名。明朗な人柄から発せられる、「骨太」と称するにびつたりな本格古典落語の演じ手で、師匠小さんの至芸の継承者としての期待も高く、ファンも多い。



桂平治

（かつら へいち）

十代目桂文治入門。平成二年、二ツ目昇進。二代目「平治」を襲名。十一年真打昇進。最後の江戸っ子といわれた故・文治の一門にあって、若き日よりその実力を評価され、名だたる各賞を受賞した白眉。師匠譲りの「落語」の体現者ぶりにも注目。



お囃子 松本優子

（まつもと ゆうこ）

三遊亭玉楽

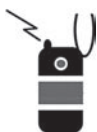
（さんゆうてい たまがく）



三遊亭圓楽入門。平成十六年、二ツ目昇進。父・好楽を父に持ちながら、その威光にすぐることなく早熟かつ達人な芸で頭角を現した落語界期待の星。二世落語家たちで「ぼっちゃん5」を結成して会を催すなど精力的な活動も嬉しい、いま注目的存在。

こみちが行けば

女流二ツ目の修行日乗⑤



柳亭こみち

師匠宅で飼われるハムスターの歴史の名前。メープル、ロイヤル、ミント、ローラ……。片仮名ばかり約二〇匹。噺家の家だから、せめて「熊」とか「八」とかにならないのか。私にはどれも馴染みにくい名前だ。ただでさえハムスター嫌いなのに……。

そんな歴史のハムたちのなかで一匹、私の心を掴んだ奴がいる。その名も「へいち」。日本語だ！ 彼は仲間より体が格段に小さく真っ白。小ささを苦にせずひたむきに生きるさまは私の目標に思えた。純でおちやめで瞳の澄んだ「いち」。私、ハムスターを愛せるかもしれない。

毎日いちごに話しかける。「私こみちです、へいちで修行します、まずは自己紹介。ぎこちないのは仕方ない。ハムスターは嫌いなんだ。どんなに可愛がっても彼らは三日でおいの記憶をなくす。油断大敵だ。へ私のおい覚えた？、へ友だちになつてくれ

る？、いちごは拒まない。私を受け入れた。師匠宅では、ハムスターは弟子より身分が上。でもいちごは決して私を見下したりしない。初めてハムスターと心を通わせた。

いちごがやって来て二年経つ頃、お使いから帰ると、いちごは死んでいた。奥床しい死に方だった。

また馴染みにくいハムスターばかり残った。人生何事も、たやすいことはないのだなあ。

（りゅうてい いちば）

社会人生活を経て、平成15年柳亭燕路入門。18年11月二ツ目昇進。趣味はピアノ、ギター、ウクレレ演奏。特技は日本舞踊。音楽流名取（香妻善美）。落語協会野球部・チームR所属。

味な脇役・話芸のきまり文句

連載第6回

親心



松井高志

赤穂義士のために御法度の武器を製造・調達した科で捕縛された「義商」天野屋利兵衛は、町奉行松野河内守の吟味を受ける。頑として依頼主の名を言わないので、奉行は利兵衛の「せがれ」・芳松を引き出し、「言わねばこの子に熱した鉄板の上を渡らせる」と申し渡して責める。

親を思わぬ子はあれど、子をば思わぬ親はなし

というような七五調のきまり文句がここで引用される。

落語で、親が子に抱く情愛ということになれば、「敷入り」や「子別れ」ということになるのだろう。この二つの演目に共通する「き

まり文句」は、

かくばかり偽り多き世の中に子の可愛さは誠なりけり

で、いずれも多くの場合マクラに出てくる。

余談だが、

何事も皆偽りの世の中に死ぬるばかりは誠なりけり

というよく似た歌もあり、これは講談『徳川天一坊』の「紀州調べ」に出てくる。子を思う心と、死からは、どうしても人は逃れられないというのである。

子を思ふ親の心は四手籠暫し憩らふ息杖もなし

これは、講談「横谷珉貞」より。腰元彫の名人・宗珉（この人の名は落語「金明竹」にも出てくる）に入門したものの、なかなか上達しない倅・宗三郎の行く末を案じる父親の心情を述べる際に引用される。「息杖」は、駕籠かきが「肩をかえる」時に轆を乗せるためのもの（支え棒）。親というのは一息つく間もないものだ、ということ。言い換えれば「いろはかるた」の、

子は三界の首枷

となる。

●まいつい・たかし

一九六〇年愛知県生、月刊誌編集者を経てフリーライター。著書に『半四郎の出世・十右衛門の背巻（メタ・フレレン）、『人生に効く！ 話芸のきまり文句』平凡社新書。など。『話芸・きまり文句 辞典』サイエンス・フィクション・アソシエーツ発行。http://wagidom.com/opriftty.com/

ラジオデイズ落語会

(毎月1回 ※来年より土曜昼に変更)

【会場】コア石響(四ツ谷) 【入場料】25000円

●第8回 12月14日(金)午後7時開演(午後6時30分開場)
柳家喬太郎 隅田川馬石 柳家三之助

●第9回 1月19日(金)午後2時30分開演(午後2時開場)
柳家小ゑん 柳家喜多八 鈴ヶ舎わか馬

※ご予約申込開始は各回前月1日から、ラジオデイズURL
<http://radiodays.jp>もしくは、予約受付専用電話〇三三三三三三
一三三〇より、先着順です。

オリンパスシンクする寄席(毎月1回不定期)

【会場】お江戸日本橋亭 【入場料】2000円

【時間】午後6時45分開演(午後6時15分開場)

●第8回 12月14日(金)

瀧川鯉昇 三遊亭天じん

●第9回 1月12日(土)

柳亭市馬 三遊亭好二郎

※ご予約は、オフィスMs〇三三三九九九一三三三三三三まで

ラジオの街で逢いましょう

ラジオデイズでは、声と語りの魅力を求めて、深夜のラジオ番組も制作・放送しています。

お相手は、ラジオデイズプロデューサーの平川克美、菊地史彦、大森美知子、そして大阪は140Bの辣腕エディター江弘毅が務めます。これまでの放送分は、ラジオデイズサイトにてストリーミング放送中です。どうぞ真夜中の話りに耳を傾けてみてください。

<http://www.radiodays.jp>

ラジオ関西毎週火曜日の深夜24時半から午前1時まで。

今後の放送予定(深夜のお客様)

11月13日 覚和歌子(詩人)

20日 アンミカ(歌手)

27日 本田久作(落語作家)

12月4日 田中宇(国際ジャーナリスト)

11日 三遊亭円丈(落語家)

神無月の落語会ふたつ

第六回ラジオデイズ落語会(十月十二日)、開口一番は入船亭遊一さんの「たらちね」。

新妻の懇懇な言葉遣いと八五郎のがさつな言動で笑わせる。そして、三遊亭遊雀師匠、今も昔も変わらぬ父子の絶妙な駆け引き。しぶしぶ金坊を「初天神」に連れて行く熊五郎だが……金坊の図抜けたおねだり作戦に抱腹絶倒。続いて古今亭菊之丞師匠の「幾世餅」。

今をときめく吉原の花魁・幾世太夫に一目惚れした清蔵の純情が胸をうつ。幕末に流行った幾世餅の由来をドラマ仕立てのCM斬、職人の儂い夢が上質な人情斬に磨かれるところが魅力。

仲入り後も菊之丞師匠で「紙入れ」。得意先の奥方といひ仲の新吉、留守宅にシケこんでいると不意に旦那のお帰り。したたかな奥方と小心者の新吉、人はいいが察しの悪い旦那とのやりとりが笑わせる。トリは遊雀師匠の「寝床」。下手の横好きが傍迷惑な大家さん、嫌がるお店の連中を無理矢理集めての義太夫語り。ふだんは良い人が、こと芸事にハマると自己チューが昂じるのは古今東西の理。遊雀師匠は駄々っ子や何かに取り憑かれた人物を演じると抜群の人物描写で爆笑を取る天才だ。

第六回オリンパスシンクする寄席(十月二十七日)は、台風直撃暴風のなかでの、鬼才vs革命派の異種格闘技対決! 先手三遊亭白鳥師匠は「恋する蛇女」。幸運を呼ぶ蛇グッズを身にまと叔母さんに恋の手管を習った小学生、初恋の女子に告白するが……。甘酸っぱい思い出も白鳥流では爆笑話に。

続く古今亭寿輔師匠、ド派手な着物で登場。道楽に飽きた若旦那が替間の一八や芸者を引き連れたの「地獄めぐり」。今では地獄も近代化? 笑いながらの地獄観光と洒落こんだ。

仲入り後は白鳥師匠。客が忘れた五十両、返そうとする居酒屋の主人を唆してネコババ決め込むおかみ。客を夫に刺殺させ川に落とす。陰惨な怪談論と思いきや、ネタ帳には「メルヘンもう半分」とある。古典落語を換骨奪胎、抱腹絶倒の笑い斬に! その秘密はキャストイングにあり。トリはもちろん、ちよび髭の寿輔師匠の「自殺狂」。売れない小説家は考える。三島も川端も売れっ子作家も自殺した。売れる奴は皆自殺。死ねば印税がつぶがつぶに違いない? 大胆不敵な態度と衝撃的なネタで突き放された客がいつの間にか術中にはまっている。恐るべし、寿輔師匠!

(ラジオデイズ寺和尚)



オリンパスシンクする寄席の"楽屋口(^o^)"

シンクする寄席オリジナルコンテンツ"楽屋口(^o^)"が携帯電話からお楽しみいただけます。



まずは、左の2次元バーコードを携帯のカメラで写してあらかじめ無料画像認識アプリ Sync ★ R (シンクする) をダウンロードしてください。

QRコードを撮影、または a@gwmj.jp (オリンパスのシンク★Rの公式サイト) に空メールを送信すると、ダウンロード先 URL が記載されたメールが返信されてきます。つぎに、Sync ★ R (シンクする) アプリを起動して、各ページにあるマークを携帯のカメラで撮影して保存・送信すればOK。オリンパスシンクする寄席のチラシのマークでもラジオデイズのお楽しみコンテンツをお楽しみいただけます。※このとき、それぞれのマークの全体が入るように、ピントが合うところまで離して撮るのがスムーズにダウンロードするコツです。どうぞ、お試しあれ!

シンクする (Sync ★ R) とは?

オリンパス株式会社の開発による、先進の画像認識技術を活用したカメラ付き携帯電話用アプリのこと。新聞・雑誌などの紙面やテレビ画面上の画像を撮影するだけで、モバイルサイトへのアクセスを可能にします。

ラジオデイズの窓から

時雨れる新宿御苑沿いの舗道に落葉が貼りつくさまも冬めき、ときおり木枯しが樹林を吹き渡る音も、そぞろ寒である。通勤電車の中では半コートの衿元にイヤホンのコードをたらし、ラジオデイズ発の「声」のチェックに余念がない。これがなかなかかどうして胸の高鳴る愉しい時間で、ときに深く聴き入って目的駅を乗り越してしまいうことも。自家中毒か熱も上がるいつぼう。

